
復元する世界（ダカーポ）持ってハイスクールD×D転生する

トトロ1234

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復元する世界^{タカイボ}持つてハイスクールD×D転生する

【Nコード】

N2532Y

【作者名】

トトロ1234

【あらすじ】

この俺、芳乃連夜は、神のミスで死んでしまったらしい。「ちょっとくら転生してこい。」といわれハイスクールD×Dの世界に転生する事になる。そこそこ力を貰い頑張っていく物語である。この度初めて小説を書く、トトロ1234です。何分初めてなので文字ミスや、不定期更新があると思いますが、よろしく願います。

プロローグ1

「あれ、ここは」

ふと辺りを見るとそこには豪華な服を着た男性が立っていた。

「やっと起きたか、早速だがお前には転生してもらうぞ。ああ、お前には拒否権がいから。」

急に变なことを言ってくる男性。

「あなたは誰ですか。というかここはどこ。」

「ああ、すまない説明がなかったな俺はロキお前から人間から見ると神様だな。」

急に神様という男

「神様？冗談をよしてくださいよ。」

「残念なことに、冗談ではないんだがな、これが、まあ簡単に言うとお前は死んだんだ。ほれ思い出してみろ、お前は車にひかれて死んだ。」

そお言うのだんだんと思い出してきた。そうだ俺あの時車に跳ねられて死んだのか。

「思い出したか、まあ今はどうでもいい、これから転生の説明をしてやる」

「転生？」

「そうだ、簡単に言うとはかの世界に行ってもらう。まあ、タダとは言わんなんか能力をくれてやる。と言っても、もう決めてるんだが。」

「なんで能力なんかくれるんだよ。」

つか、勝手に決めんなよ。

「お前が行く世界はそこそこ危険だからな。それにお前を殺したのは、俺だしな。だから転生させるんだが。」

今なんて言ったこいつが俺を殺した！？

「まあ、そういうことだから、逝ってこい。」

「ちょ、ふざけんじゃねえ。」

そう言っと、突然地面に穴があいた！

「じゃね〜^^」

「わあああああああああああああああああああ！？」

「いったか。まあ、転生させたんだ、楽しく見せてもらおうかな。」
なあ、・・・・人間。

キャラ設定 能力設定

名前

芳乃連夜

容姿

fortissimoの芳乃零二

年齢

主人公と同じ年

説明

神によって転生され、小学生の時に能力は覚醒した。この時期には兵藤一誠は友人で、その関係で、兵藤一誠の家によく遊びに行く関係で一誠の親とは仲がいい。家族とは中学生の時に海外に行ってしまう、今では一人暮らしである。ちょうどその時に、魔術師に出会い魔力の基礎的なことは教わっていたが、まだ、完全には使いこなせない状態だが、それでも中級悪魔、堕天使、天使に負けないほどのちからである。

ステータス

筋力 B + 魔力 EX

耐久 A 幸運 A

敏捷 C +

能力

復元する世界 ダ・カーボ

対象を24時間以内の状態に戻すことが出来る能力。また24時間以内に会った人物なら手元に呼び戻すことも可能。ただし例外としては対象の魔力に関しては戻すことが出来ない。

戦闘においてあまり役に立たない能力に思えるが、相手を強制的に召喚して、隙を作って攻撃をおこなうという手段などにも使える。また「アインハルト術式固定」を併用することによって、相手の攻撃をくらっても元に戻し続け何もなかったかのようにする技術を会得している。

神討つ拳狼の蒼槍 フエンリスヴォルフ

無意識に擬似概念魔術兵装によって自身の膨大な魔力を拳に集中させて繰り出す拳撃。その威力は神話魔術と互角の威力を持つ。

瞬間魔力換装 ブリューゲル・ブリッツ

かつて魔力魔術兵装と呼ばれていた戦闘技術で、自身が独学で戦闘経験と訓練で編み出した技。一瞬だけ己の魔力を爆発的に高め、自らに取り込み固定することによって自身が弾丸のようになって移動することが出来る身体能力の強化。時空間すらも歪めるほどの魔力爆発が発生するほどで、そのスピードは光速をも凌駕する。魔力消耗が激しいので長時間の使用には向かない。

神器

ファンタズムミラー
幻想の鏡の虚像

この神器は、単純に自分または他の人の分身を生み出す能力。ただ実態がないため分身で攻撃する愚か物をもつことすらできない。

Life 1

あの神から転生して数十年、俺は貰った能力の修行をしていた。あの神が言うにわ、この世界は危険だと言っていたが、この数十年は平和が続いている。まあ、平和が続くのはいいことなのだが。

「あゝ眠いぜ。」

今、俺は学校の通学路を歩いている。数十分、歩いたらがっこうについてしまった。さっさと教室に入ると、エロ三人組いた。

「よ、お前たち朝から元気だな。」

そう言々と振り向く三人組。

「おう、連夜おはよう。」

そう言ってきたのは、兵藤一誠、通称イツセーこいつとは幼馴染だったりする。こいつはただこの学校に女子が多いだけこの学園に入ってきたスケベである。

「よー心の友よ、おはよう。」

次にこいつは、松田。爽やかなスポーツ少年に見えるが、変態だ。

「ふっ・・・今朝は風が強かったな。おかげで、朝から女子高生のパンチラが拝めたぜ。」

キザ男のようにカッコつけているメガネは元浜。メガネを通して女子の体型を数値化できる特殊能力を持っている変態だ。

「よー連夜、聞いてくれよこいつ女子と付き合っているとか夢見ているんだぜ。」

「いや、ほんとなんだって!」

「そうか、イッセー早く病院行った方がいいぞ。」

「ちが~~~~う!」

「五月蠅い!ほらさっさと座れ。先生来るぞ。」

自分の席に行って寝た。

放課後

「じゃあなお前たち。」

「おい最近、付き合い悪いぜ。」

「そうだぜ。」

そう言ってくる

「仕方ないだろ、バイトなんだから。そついうわけだからじゃあな。」

そう言っ教室を出ていく

「あゝあ、遅くなっちまった。」

そう言いながら夜道を歩いていると、上から何か降ってきて反射的に避けた。落ちたものを見ると光の槍見たいのがあった。

「ほーお、今のを避けるか人間。」

上を見ると黒い翼が生えた男がいった。

「だが、お前はここで死ね。お前の身に神器あることを恨むんだな」

男はそう言つて光の槍を放ってきた。急なことで避けられなかったため貫いてしまった。

そして男はそのまま帰ろうとしたら、声が聞こえた。

「復元する世界」
ダ・カーボ

「てめ、何しやがる。」

そう貫いたはずが何もなつかたように立っていた。

「自分からやってきたんだ、やり返されても文句わ言わねえよな。」

そう、膨大な魔力纏わせながら言ってきた。

その様子見ていた者にきずいてはいなかった。

L i f e 2

「貴様、どうやってその傷いや、何だその膨大な魔力は!!」

そう言ってくる男。

「はん、さっきまでの威勢どうした。」

「なめるな!! たがが人間風情が!!」

光りの槍を向けてくる男。しかし、貫こうとしたら誰もいなかった。

「ブリューゲル・ブリッツ
瞬間魔力換装」

声が聞こえたあと、いつの間にか後ろにいた。

「これで終わりだ! 神討つ拳狼の蒼槍!!」
フェンリスヴォルフ

その拳には、膨大な魔力を込められていた! まるで存在自体喰らいつくすように。その辺周辺は塀やらガードレールや道路が無茶苦茶

に喰いあさわれたようになった。

「やべ、やりすぎた。一応抑えてやったのに。」

「これ直さないとやばいよな。はあゝ。復元する世界ダ・カーボ」

そう言って辺りを戻す。

「それにしても、あいつはなんだったんだろう？」

そのまま家に帰っていった。

「はい部長、今さっき人間が墮天使を倒してしまいました。」

「人間ではありえない膨大な魔力を。」

「では、部室に戻ります。」

これが塔城子猫^{とうじょうこねこ}が芳乃連夜に興味をもった瞬間であった。

「ふあゝゝ寝みいぜ。昨日の夜せいで全然ねむれなかったぜ。」

時間的にもいつもより早い今日はイッセーと行くか。

「さて飯でも作りますか。」

飯を食い終わったあと二軒隣のイッセー家いった。

「おい、イッセー今日は一緒にいこうぜ。」

玄関の扉が開いたら衝撃の光景があった。

それは、イッセーが美少女といたからである。

朝の登校俺はこれまでこれほどの視線を感じたことがない。原因は言うまでもない、隣の奴らが原因だ。何故あのイッセーが三年のリアス・グレモリーがイッセー家いたのかわからない。いつの間にか学校の玄関ついていた。

「後で使いを出すわ。放課後にまた逢いましょう。その貴方も。」

微笑みながら、そう告げてきた。

何故？俺も？

よくわからないが、そのまま教室に向かう。そしたらいつの間にかイッセーの後頭部を殴る奴がいた。

「どっついつことだー！」

涙を流しながら松田が叫ぶ。

俺はそのままイッサー^①に使い席に着いた。

放課後。

「や、どうも」

教室を訪ねてきた男子を見た。イケメン王子こと、木場裕斗^{きばゆうと}だった。

「で、何のご用ですかね。」

不機嫌な声で言うイッサー

「リアス・グレモリー先輩の使いで来んだ。」

「・・・OKOK、で俺どうしたらいい。」

「つか、なんで俺も呼ばれたんだ。」

「いやー！」

急に女子たちが叫び出した

「汚れてしまうわ、木場君！」

「木場君×兵藤なんてカップリングは許せない！」

「うっん、もしかして芳乃君×木場君かも！」

「イッセーと俺は思った。」

（うぜ。マジうぜ）

L i f e 3

木場の後に残きながら向かった先は、後者の裏手だ。

木々囲まれた場所には旧校舎呼ばれる、現在使用されてない建物であつた。

「ここに部長が居るんだよ。」

そう告げる木場

それにしても綺麗だ掃除はしているということだろう。

そうしてるうちに、目的の場所とやらについたみたいだ。木場の足が、とある教室の前で止まる。

戸にかけられたプレートを見る

「オカルト研究部」

なぜオカルト？

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってきて頂戴。」

先輩は中にいるようだ

戸を開け、入ると、室内に至るところに謎の文字書き込んでいた。そして、一番特徴的なのは中央の円

陣。あとはソファーいくつか。デスクも何台が存在する。ソファーに座っている女の子を見た。確か一年の塔城子猫。

こちらに気づいたのか視線が合う。

「こちら、芳乃連夜くんに兵藤一誠くん。」

木場が紹介してくれた。そしたら、ペコリと頭を下げる塔城子猫。

「食べますか？」

ようかんを差し出してくれた。

「ありがとうございます。」

と言ってようかんを貰った。

そしたら水の音がきこえてくる。

よくみるとシャワーカーテンがあった。って、シャワー付いた部屋なのか！

水をとめるおと

「部長、これを。」

奥にだれかいるのか

「ありがとう、朱乃。」

カーテンの奥で着替えて着替えているようだ。イッセーをみると案の定、鼻を伸ばしてた。

「……いやらしい顔。」

ぼそりと呟く声。俺もそう思う。

「ごめんなさい。昨晚、イッセーのお家にお泊りして、シャワーを浴びていなかったから、いま汗を流したの。」

って、やっぱり泊まっていたのかよ！

視線が先輩の後方に映る。確か姫城朱乃ひめじあけの

「あらあら。はじめまして、私、姫城朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを。」

ニコニコ顔で挨拶される

「こ、これはどうも。兵藤一誠です。こ、こちらこそ、はじめまして！」

「芳乃連夜です。こちらこそはじめまして。」

俺たちは挨拶を交わす

それを、「うん」と確認するリアス先輩。

「これで、全員揃ったわね。芳乃連夜くん、兵藤一誠くん。いえ、イッセー。」

「は、はい」

「はい」

「私たち、オカルト研究部はあなた達を歓迎するわ。」

「え、あ、はい。」

「はい」

「悪魔としてね。」

「どうやら、俺の平和が崩れそうです。」

L i f e 4

「粗茶です」

「あ、どうも。」

ソファーに座る俺たちへ姫島朱乃先輩がお茶お入れてくれた。

ずずっと、飲み。

「「うまいです。」」

「あらあら。ありがとうございます。」

嬉しそうに笑う姫島朱乃先輩。

「朱乃、あなたもこちらに座ってちょうだい。」

「はい、部長。」

と腰おろす姫島朱乃先輩。

「単刀直入に言うわ。私たち悪魔なの。」

・・・と、とても単刀直入ですね。

「信じられない顔をね。でもあなたたち昨夜、黒い翼の男を見たでしょう?」

確かに。俺はそれを見ている。って、イッセーお前も襲われたのか！

そこからいろいろな話をされた。なんでも、堕天使と悪魔は地獄の覇権を争っているとか、堕天使と悪

魔を問答無用に襲いかける天使。しかも女子と付き合っているとか夢が本当だったとか。しかも、女子

と付き合っていた子が堕天使とか、俺たちが殺されそうになったのは神器を持っていたから。次に神器

について説明された。なんでも、俺達の中に宿っているという規格外の力らしい。

「目を閉じて、一番強い力を出せる想像して。」

イツセーにいう

「一番強い存在……。ドラグ・ソボールの空孫悟かな……」

「そのまま、思いっきり力を解放する感じでやりなさい」

「ドラゴン波！」

突然イツセーの左腕が光り出した！そして光がやんだあとには左腕に赤い宝玉の付いた赤い籠手のよう

なものがあつた。

「な、なんじゃこりゃあああああ！」

叫び出すイツセー

「うわゝ、なんかすげーぜ」

「さて、次はあなたよ、芳乃連夜くん。」

「え、俺もドラゴン波を打てと？あの馬鹿じゃあるまいし。」

「馬鹿って、何だよ馬鹿って！」

「すまない、変態だったな。」

「く、否定できない！」

「馬鹿だ。えっと、一番強い力を出せる想像すればいいんですよね？」

「ええ、そうよ。」

「わかりました。やってみます。」

目を瞑り、想像した。

自分に眠るもう一つの力を、

箱の中から取り出す感じで、

解き放す！

目を開けると、大人一人分ぐらいの鏡が出てきた。みためはほんの少し古い長細い鏡。

「これが俺の？」

「それが神器。貴方たちのものよ。一度ちゃんと発現ができれば、後は貴方たちの意思でどこにいても発動可能になるわ」

この鏡が神器・・・？

「あなたたちはその神器を危険視されて堕天使たちに殺されそうになったの」

「イツセー瀕死の中、貴方は私を呼んだのよ。この紙から私を召喚してね」

その紙には、こう書かれてた。

『あなたの願い叶えます！』

そんな謳い文句と奇妙な魔法陣の描かれたチラシだった。

「これ、私たちが配っているチラシなのよ。これは、私たち悪魔を召喚するためのもの。最近魔方阵を書くまでして悪魔を呼ぶ人はいないにの。こうして、チラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配っているの。あの日私たちの使い魔が繁華街でチラシを配っていたの。それをイツセーが手にした。そして、堕天使攻撃されたイツセーは私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かったんでしょね。普段なら眷属の朱乃呼ばれるんだけど」

なにイツセーは、瀕死重体だったと。

「召喚された私はあなたを見てすぐに神器所有者で堕天使に害されたのだと察したわ。イツセーは死ぬ寸前だった。そこで私はあなたの命を救うことにしたの。」

「悪魔としてね。あなたは私の眷属として生まれ変わったわ。」

え、何イツセー悪魔になったの！

「改めて、紹介するわね。裕斗」

「僕は木場裕斗。兵藤一誠さんと芳乃連夜くんと同じ二年生ってことはわかってるよね。僕もあくまです」

「・・・一年生。・・・塔城子猫です。・・・悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。今後よろしく願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔であるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、芳乃連夜くんイッセー」

L i f e 4 (後書き)

感想をお願いします。

L i f e 5

「ちょっと、待ってくださいませんか。なんで俺が呼び出されたのがわからないのですか。確かに俺は神器を持ってましたけどそれで呼び出された理由がわからないんですが？」

そう、どうして俺が呼び出されたのがわからないんだ。

「あら、そうだったっわね。あなた昨夜、一度墮天使を葬ってるでしょう。それに神器を使わずに辺り一面壊れたもの元に戻したでしょ？子猫から聞いているわ。どうやってやったのかしら。」

「復元する世界ダ・カーボことですか？」

「そう、復元する世界ダ・カーボ言うの？どうゆうものか教えてくれるかしら？」

「復元する世界ダ・カーボ対象を24時間以内の状態に戻すことが出来る能力。また24時間以内に会った人物なら手元に呼び戻すことも可能。ただし例外としては対象の魔力、生命力に関しては戻すことが出来ない能力です。」

「それに、墮天使を倒した方法なんてただ魔力を拳にのせて放っただけですよ。」

そう、説明する。

「そう。私があなたを呼んだのは勧誘するためなの。」

「勧誘ですか？」

「ええ、あなた悪魔になってみないかしら？」

「俺がですか？」

「そうあなたは素質もあるし魔力もある。どうかしら？」

そう言ってくるリアス先輩

「すこし、考えてもいいですか？」

「ええ、いいわ」

そう言って俺たちは帰った

「それにしても、芳乃君の能力は興味深いわね。そう思わない皆？」

そう言っただけに言う

「そうですね、それに彼は魔力を封印してましたわね。」

「それに、普通は魔力を拳に乗せて放つても、あそこまで辺りを破壊をすることなんてできないし。それほど莫大な魔力を拳に乗せていたことですね」

「そうね、もしかしたら私より多いかもしれないわ。どうしたの子猫？」

「いえ、．．何でもありません。」

「あらず、それにしても彼らは面白いわね」

帰り道イッサーが急に話しかけてきた。

「なあ連夜？復元する世界だっけ？ダ・カーボそんなのいつから持ってたんだよ。」

「小学生の時だなこれが使えたのは。」

「そうなのか、それにしても今日はいろいろあつて疲れたぜ。」

「同感だ。俺どうしようかな」

そついま頭にあることは勧誘のことだった。

「一緒にやろうぜ悪魔。部長の話だと爵位を貰えばハーレムを作れんだぜ。」

馬鹿なことを言ってくる

「興味がないね。ま、少し考えてみるよ。」

「そうか」

そう話していると家についてしまった。

「じゃあなイッセーおやすみ」

「ああ、連夜おやすみ。」

家に帰ったあとすぐ寝てしまった。

L i f e 5 (後書き)

感想をお願いします。

L i f e 6

学校の帰り、自分は悩んでいた。リアス先輩からの勧誘の返事をどうすればいいのか、それにイツセーのことも心配だ案外あいつ危険なことにも巻き込まれるしな俺も巻き込まれるが。しかし、爵位も興味がないんだよな。と考えながら歩いていると

「はわう！」

ん？突然の声。

後ろから聞こえると同時にボスンと何かが転がる音がする。

振り向くとそこにはシスターが転んでいた。

「おい、大丈夫か？」

と、手を差し伸べた。

「あうう。すみません、急いでたので」

外国語で話してきた

そう思いながら手を引いて起き上がらせる。ふわっ。風でシスターのヴェールがとんでいく。

ストレートの金髪の髪が露になる。そしてシスターの素顔へ視線が

移動する。

俺は一瞬心を奪われる。目の前の金髪美少女がいる、あまりのも綺麗で引き込まれそうになった。

しばし俺はその女の子の見惚れてしまった。

「あ、あの……どうかしたんですか……？」

「あ、すまん。えっと……」

言葉が伝わらない。

くそ、見惚れてたとはいえない。と思っていたら道を歩いているイツセーがいた。

「おい、イツセーか、ちょっとこっちに来い！」

「うお！なんだよ連夜かよ。で、そっちの金髪美少女は誰だよ。まさかお前また……」

「またってなんだよまたって。ただそこで歩いていたら転んでいたから助けたただけだ」

「そうなのか、それでまたフラグを立てたんだな！」

「フラグてなんだよ」

それからこのシスターとはなしていたらどうやらこの街の赴任してきたらしい。どうやら言葉が伝わらなかつたらしくてもよっていたらしい。俺は普通に英語を話せるからいいんだがしかしあのイツセーが英語の時間に英語を話していたらクラスのみんなはたいへんおどろいていた。あとから聞いたら悪魔になると相手が聞こえる言葉になるそうだ。

「教会ならしっているかも」

と俺が言うとシスターが目を輝きながらはなしてくる。

「本当ですか！ありがとうございますうー！これ主のお導きのおかげですね！」

涙を浮かべながら、俺たちに言う、ほんとに可愛いなこの子。

そして教会に向かう途中、公園の前を横切る。

「うわああああん」

その時、子供泣き声が聞こえた

「だいじょうぶ、よしくん」

お母さんがついているから、だいじょうぶだろう。転んだだけだし

「おいおい」

子供のそばにシスターは近寄った。

「大丈夫？男の子なんだからこのくらいの怪我で泣いてはダメですよ」

シスターが子供のあたまを優しくなでる。

次の瞬間シスター手のひらから光が発せられ子供の膝を照らしているでないか。

なんだあれ？魔力か？よく見れば子供怪我がみるみる消えていく。傷を治しているのか？

俺の脳裏を過ぎるものがあつた

神器

特定の人間に宿る規格外の力

あの光を見てから体全体が疼くそれはイッセーもおなじだった。

いつの間にか怪我がふさがっていた。これはすごい、これが神器の

力。

「はい、傷は無くなりましたよ。もう大丈夫」

子供の頭をひとなですると、俺たちのほうへ顔を向ける。

「すみません、つい」

彼女わ舌を出してえ笑う

「ありがとう！おねいちゃん」

「ありがとう、おねいちゃん。だって」

イツセーが通訳する。

「…その力……」

「はい。治療の力です。神様からいただいた素敵なモノなんですよ」

治療を終えたアーシアの顔はどこか寂しげなものだった。

さすがのイツセーも流石にこの状況に混乱している

会話はそこで一旦途切れ協会に向かう数分進んだところに古い教会が存在した。

イツセーを見ると顔が真っ青汗も出ている。そういえばイツセー悪魔だからかここからはやく立ち去ったほうがいいか。そう思っ
て俺は言う

「じゃあ、俺たちいくよ。」

「待ってください！ここまで連れてきたお礼を教会で・・・」

「いや俺たちも急いでいるから」

「・・・でもそれでは」

困る彼女

しかしここで断らなければイツセーが危ない。

「俺は芳乃連夜。連夜と呼んでくれ。でこいつは兵藤一誠。俺の幼馴染、みんなからイツセーと呼ばれている。君は？」

「私はアーシア・アルジェントと言います。アーシアと呼んでください！」

「おう、じゃあなアーシア。」

「じゃあなシスター・アーシアまた会えたらいいね」

「はい！連夜さんイッセーさんからなずまたお会いしましょう！」

頭を下げるアーシア

俺も手を振って別れを告げる。

そして彼女とあんなことになるのは今の俺はおもってもいなかった

L i f e 6 (後書き)

どうだったでしょうか？感想をお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2532y/>

復元する世界（ダカーポ）持ってハイスクールD×D転生する

2011年11月17日18時26分発行